内陸アジア言語の研究
XXVII

シルクロードの古墓から出土した「玉手箱」
—— 2006 年発掘・アスターナ古墓群西区（II 区）603 号墓出土の「木函（きばこ）」——
..... 1
白 須 淨 眞

80 TBI 774 b: A Sanskrit − Uigur bilingual text from Bezeklik 43
Dieter Maue & Niu Ruji

19 世紀後半の大通河付近のチベット語語彙について
—— *Mongoliia i strana Tangutov* を資料として —— 93
海 老 原 志 穂

ロシア科学アカデミー東洋文献研究所所蔵契丹大字写本 123
ヴャチェスラフ・P・ザイツェフ
荒 川 慎 太 郎（訳）

黒水城出土「宋西北辺境軍政文書」—— 概要と研究状況 —— 161
伊 藤 一 馬

中央ユーラシア学研究会
２０１２

ISSN 1341-5670

STUDIES ON THE INNER ASIAN LANGUAGES XXVII

Jōshin Shirasu : A Wonderful Wooden Small Box Excavated from an Old Grave along the Silk Road: A Small Box Unearthed from the Tomb 603 at the West Section of Astana in 2006 1

Dieter Maue & Niu Ruji : 80 TBI 774 b: A Sanskrit－Uigur Bilingual Text from Bezeklik 43

Shiho Ebihara : Tibetan Words Discribed in the Late Nineteenth Century near Da-tong River: Based on *Mongoliia i strana Tangutov* 93

Viacheslav P. Zaytsev : A Manuscript Codex Written in the Khitan Large Script from the Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Sciences (Tr. by Shintarō Arakawa) 123

Kazuma Itō : The Military and Administrative Manuscripts on Northwest Frontier of the Song Dynasty in Xara-xoto Documents: The Outline and Research Trend 161

The Society of Central Eurasian Studies

2 0 1 2

ロシア科学アカデミー東洋文献研究所所蔵
契丹大字写本 *

ヴャチェスラフ・P・ザイツェフ
荒 川 慎 太 郎（訳）

1. 序
2. 文献の説明
3. 写本書籍の製作技術
4. 写本テキストの完全性
5. 写本の言語と文字
6. 結び

ロシア科学アカデミー東洋文献研究所（旧ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支所）写本文書部の，漢語文献フォンド <Nova> には，「女真語による写本」（整理番号 No. 1055, 請求記号 N176(1)）として整理目録に登録されている，ユニークな写本が所蔵される．本論文では，当該写本の予備的な調査の結果が提示される．写本について記述し，言語と文字についての同定を行った結果，契丹大字による契丹語で写本が記されていることを示す．

キーワード

契丹文字文献，契丹文字，契丹大字，契丹小字，契丹語，女真文字，
綴じ本，写本，製本，綴じ

---

* 原著：Зайцев, В. П., Рукописная книга большого киданьского письма из коллекции Института восточных рукописей РАН. In: *Письменные памятники Востока*, 2011, № 2(15), pp. 130-150. 訳者より：原著者の了解を得て，章番号を付した．また，原著者からの追記（注）を盛り込んだため，注が増え，番号が原書とずれている．

(1) {翻訳者注：N は Nova の略号であり，実際にはキリル文字「H」（エヌ）で表記される．}

※本論文は，2010 年 11 月 29 日，「2010 年ロシア科学アカデミー東洋文献研究所学術定例会議」における筆者の報告「ロシア科学アカデミー東洋文献研究所漢語フォンドからの未知の写本」に基づいている．報告と比較して，本論文は実質的に拡張されたとはいえ，（それまで）筆者によってなされた，文字と言語の同定結果は再検討されていなかった．そして，改変されること無しに本論文として刊行された．論文中の全ての図（**図 1~3**）は筆者によるものであり，写真（**図 4**）はロシア科学アカデミー東洋文献研究所の写真家 S. L. シェヴェルチンスカヤによるものである．

当該のテーマに臨む作業で，筆者に助力してくれた全ての方に感謝申し上げたい．なによりも，この興味深い写本に取り組むよう提案し，資料の写真を委任して下さった，ロシア科学アカデミー東洋文献研究所所長 I. F. ポポーヴァに感謝したい（我々の討議は 2010 年 10 月 29 日に行われた．その時，筆者は初めて写本を見て，その研究に取り掛かった）．そしてさらに，助言，指摘，意見それぞれに対して，E. I. クチャーノフ，Yu. L. クローリ，A. F. トロツェーヴィッチ，Yu. V. ボールタチ，そして V. V. ポローシンにも謝辞を述べる．この他，Yu. V. ピルグーンに感謝の意を表したい．彼の友好的な助力無しには，刊行に際する論文の準備を進めることができなかったであろう．

1. 序

写本 N176（フォンド <Nova>，整理番号 No. 1055）は，1954 年，ロシア科学アカデミー東洋文献研究所（かつてのソビエト社会主義共和国連邦科学アカデミー東洋学研究所東洋写本セクション）に収蔵された．写本は「解読の見込みを明らかにするために」モスクワの東洋学研究所幹部に送られた．ソビエト社会主義共和国連邦科学アカデミー東洋学研究所の学術秘書代行である B. M. ポツホヴェリーヤにより署名された添え書きに，そのことが証言されている．添え書きは，ソビエト社会主義共和国連邦科学アカデミー東洋学研究所東洋写本セクション主任である D. I. ティーホノフに宛てられて

おり，1954 年 11 月 15 日の日付が記されている．添え書きから明らかになるのは，写本は，ソビエト社会主義共和国連邦科学アカデミーキルギス支部の言語･文学･歴史研究所からモスクワに送り届けられたが, モスクワの（東洋学）研究所は写本に関するデータを把握していなかったため，それについて何も通知することはできなかったということである．

当該写本がロシア科学アカデミー東洋文献研究所に収蔵されて以後，誰かがそれを研究したか，筆者は調べ続けたが明らかにできない．私的なやり取りで, E. I. クチャーノフは, B. I. パンクラトフは写本を「見た」かも知れないが, いかなる文字によるか証明も表明していない，という見解を述べた．このテーマについての研究や刊行された論文なども存在していない．長い間，写本を記した言語は未知のものとみなされ，一方写本自体は請求記号も整理番号も持たなかった．整理目録の登録の書き込みは「2009 年 3 月 10 日」とされるのみであり，その時，写本は請求記号も受け入れた[(2)]．誰が，いつ，写本の言語を女真語と同定したのかわからない．しかしあえて，それは暫定的な仮説だったと推定する[(3)]．

---

(2) 当該の書き込みは，ロシア科学アカデミー東洋文献研究所写本文書部の，漢語文献フォンド <Nova> の整理目録 No. 2 に保存される．{翻訳者注：инвентарная книга は研究所写本文書部の内部資料であり, 公刊された「目録」ではないため, 以降「整理目録」とする．}

(3) I. F. ポポーヴァの私信において筆者に伝えたように，2007~2010 年，彼女は文書の言語に関して国内外の研究者（例えば，2008 年 11 月聶鴻音と孫伯君，2010 年 7 月に呉英喆）に意見を求め，そのために彼らに（複写の機会は無しに）写本の紙の数枚のデジタル画像を見せた．ファイルの日付と EXIF からの撮影パラメーターによれば，これらの撮影はカメラ Pentax Optio A10 によって 2007 年 3 月 23 日に行われ，全部で 16 写真 —— その中でテキストのあるものは 9 枚 —— が撮影された．（漢字に似ている）文字の特徴を根拠として，I. F. ポポーヴァの依頼で写真を見た全ての専門家が，当該の状況に最も論理的な仮定として語ったのは，それは契丹文字か，女真文字か，渤海文字であろう，ということである．しかしそれらの可能性のある候補から 1 つを支持するようなどんな根拠も無く，提示もされなかった．写本は女真文字で書かれたという仮説が最も可能性が高い，という意見が，研究者の中で優勢だったことを筆者はここで言及したい．整理目録にそのような記入が出現したことはこれに因むものであろう．

2. 文献の説明

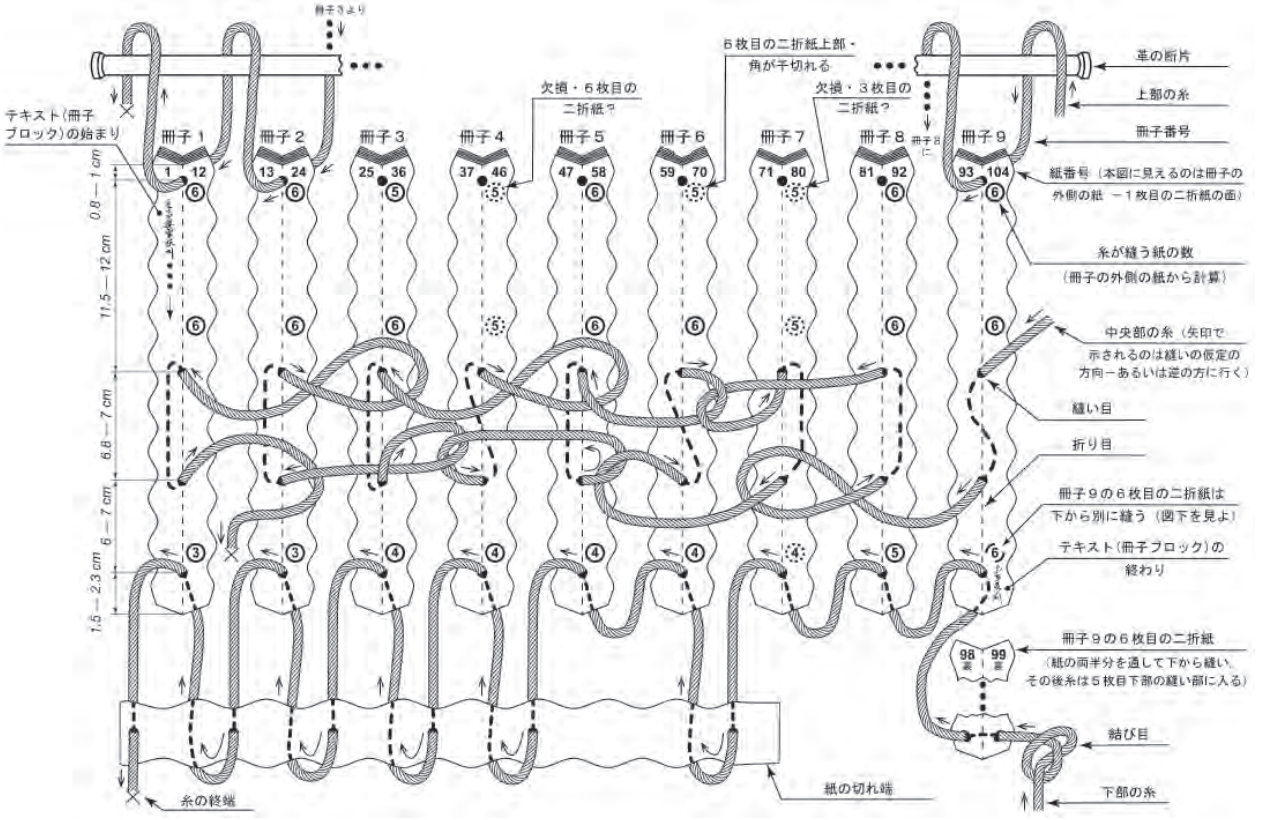
写本は「綴じ本」の様態を示す[(4)]. 残存するのは：1）1つのブロックごとに間で縫い合わされた9つの冊子，2）1つの分けられた冊子｛翻訳者注：以下「分冊子」｝，3）互いに連結されていない，二つ折り紙｛翻訳者注：オモテ面に左右計2頁を持つ紙．以下「二折紙」と訳す｝7枚，4）テキストの記された布地の断片，である．総計で，冊子に113頁，分かれた二折紙7枚，布地断片テキスト1枚（詳細解説は**表1**を見よ）である．写本はある種のケース――革製で，3つの厚紙紙片を含み，別々に収納される――に収納されている．

写本の年代と地域の問題（時代，地域，写本の成立事情），この写本に関わった人物の特定（書き手，注文者などの名），そしてテキストの同定（著作の性質の解明，その名称，内容，そして著者）は，現段階では決定的解決は不可能であると認められる．当論文ではこれらに関して，本題に関係する箇所のみに言及するに留める．

綴じ本と二折紙．写本の各冊子は，縦に半分に折られ，互いに挟みいれられた，何枚か（たいてい6枚）の二折紙からなる．冊子は，3本の，太い灰白色の糸で内側から縫い付けられ，1つのブロックごとに連結されている（**図1**を見よ）．縫う際に，冊子の1ブロックは，背側の上と下に，現存していない表紙か何か別のもので結び付けられていた．これは，現存している綴り目上部の円筒状の革の薄い断片，下部の大きくない紙断片から判断できる．

(4) 綴じ本（冊子本）は1冊または何冊かの冊子本から綴じられたもので，各冊子は，縦に折られ，纏められ，それ自体または他の筆記資料の適当な紙と連結されている．冊子における紙のまとめ方と，綴じ本の綴じ方は，多種多様だという特徴がある（クチャーノフ 1988, pp. 389-393）．「二折紙」とは，折られて半分になった左右半分が，それぞれ別の頁を提示するような紙片を指している．その裏面とともに，このような1枚を「頁」と呼ぶ．

図１　綴じ本の冊子の縫い方の図



それに加え，上部にはより薄い褐色の糸が絡んでいること，下部には，緑色の端切れが絡むこと，を明らかにしうる．分冊子は別に縫いつけられる ―― 1 本の糸，異なる長さの 1 縫い，下から，別の糸からの結び目が残っている真ん中まで[5].

二折紙の半分（1 頁）の左右に，テキストを区切る「枠」(2 本の水平な線：1 本は頁の上に, 1 本は下に), 罫線 (7 本の, 薄い垂直な線[6]) が書き込まれており，裏面は白紙で残されている．二折紙は冊子の中にまとめられるので，それらの白紙面とテキストで覆われた面で互いに向かい合っている．言い換えれば，冊子の頁は交互に書き込まれている：まず，折られた紙の外側の面に書かれた二折紙があり，それに折り入れられている次の二折紙では紙の内側の面が用いられる．そのために，2 頁の文字の書かれた面と，2 頁の文字の書かれない（白紙の）面が互い違いに出現するのである（**図 2** を見よ）．裏面の白紙は，ごくまれに文字を書くために利用される（113 頁目の裏，二折紙 1, 7 の裏を見よ）.

寸法：縫い合わされた 9 つの冊子の内の，冊子 1 ブロックの厚さ 2.5-3 cm；二折紙 38.2 × 27-27.5 cm；1 頁 19 × 27-27.5 cm；枠に囲まれたテキストの範囲 16.4-17.3 × 24.5-25 cm.

---

(5) 分冊子の縫いの「普通と違う」特徴はこう説明されるだろう．1）（冊子の）束の縫いが開始か完了かによる（冊子は綴じ本の開始の冊子か最後の冊子かである），2）再度縫われている（冊子は綴じ本から分けられ，それ自体の紙との当初の接合を失くし，縫い直された），3）独立して縫われている（冊子は，冊子の束と全く縫い合わされていない）.

(6) テキストを区切る枠とは，普段なら直角であるよう意図されているが，ここで我々が目にするのは，テキストの上と下にあるただ 2 本の水平線である．テキストの左右に記入された垂直の薄い線は罫線と全く同じ筆跡である．水平な線・垂直な線の，異なる性格については，16，17 頁における垂直な線の欠如からもわかる.

枠は 1 本線でできていて，行は罫線で区切られている．上下の余白は 0.8-1.25 cm，外側の余白は 1.4-1.5 cm，内部（二折紙の，枠の間の右半分と左半分）は 2-2.5 cm，行の幅は 2.6-3 cm．ある場合には，枠と罫線は，頁に相対的に歪んで配され（例えば 22-23 頁において），線は不揃いで，寸法は一貫しない．湿気で紙が歪んでいるため，正確な測定は難しい．

丁付けは無い[(7)]．

1 頁につき 6 行．完全な行の文字数は 17 から 26 である．行によっては，より小さい文字で 2 行に分けて書かれるものもある[(8)]．時折，手書きによる修正が現れる．

テキストは墨で，行書体から草書体の間の崩し字で，いくつかの書きぶりで記されている．写本の大部分は，一人の筆跡――すなわち整然と均一のスタイルで――で書かれている．そのような様態のテキストを筆者は「通常の」（テキスト）と呼ぶ．写本の別の部分は，ぞんざいに大きめの文字で，しばしば下の欄の境を越えて逸脱して書かれる（92-100 頁）か，あるいは雑に，しかし細かい文字で（101-113 頁），書かれる．二折紙 1, 7（また布地断片も）は別の様態のテキストである（**表 1** の記述を見よ）．

文字の方向は垂直（縦書き）で，上から下へ一列に，右から左に進む．それについて詳しくは「**5．写本の言語と文字**」の章を見よ．

---

(7) 冊子の紙と分かれた二折紙の便宜的な丁付け（頁番号）は筆者によるものである．最初に番号を打たれるのは冊子の束で，次に分冊子である．分かれた二折紙は，筆者の予想した，それらの相対的な順序に従って番号が打たれる．写本の知見の現時点の段階では，便宜的な丁付けは，テキストの構成についての問題は解決せずに，ただ総合的な算出に役立つのである．紙の裏はラテン文字 B の付加で番号が打たれる．

(8) {翻訳者注・原著者による付記：テキストの完全な分析は終了していないが，この書籍における文字のおおよその総数は，15,000 文字（20 文字 × 6 行 × 127 頁）である．}

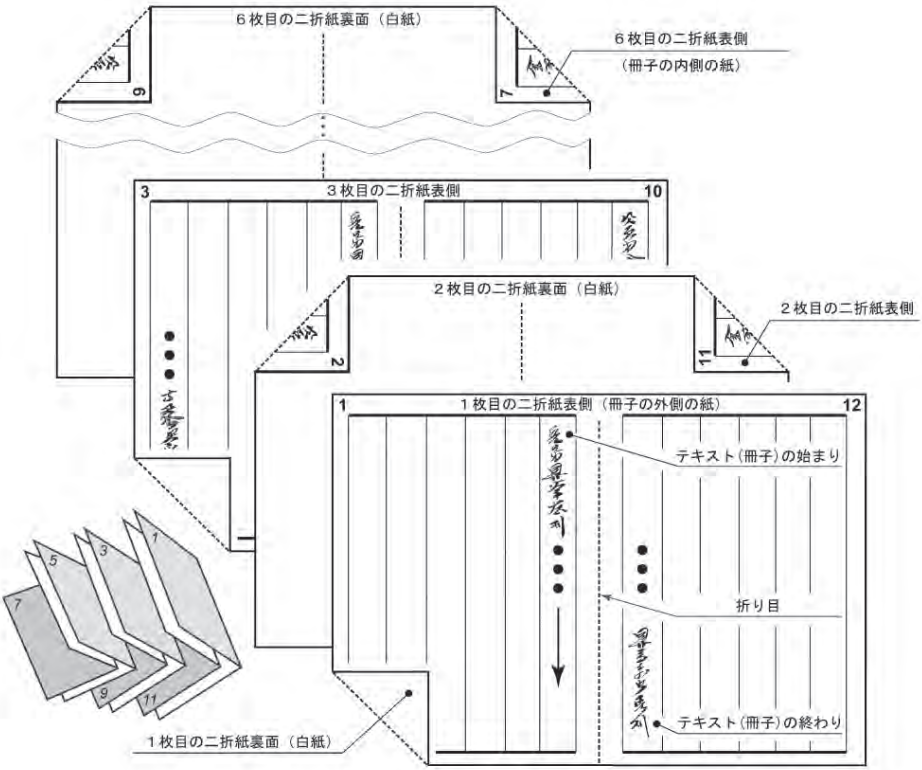
紙は白く，黄味を帯びた色合いで，粗雑かつざらざらしている．保存の時期と場所により，ざらざらになったような印象を受ける．二折紙 1, 7 はより柔らかく，劣化により極端に薄くなったように見える．漉き縞は 2 mm である．

保存状況は悪くはない．冊子の外側下方の隅は大きく損なわれている．紙は湿気で歪み，多くの頁表面に白い層が滲み出ている．石膏によるものかもしれない．紙の一部は，皺になり，破れ，テキストの文字の断片が失われている．紙の中には，隣り合う頁のテキスト（文字）が，鏡のように（印面が移った）跡を残している．分かれた二折紙は，先に列挙した不備を全て含んでおり，また激しく劣化しているため，第一に修繕が必要である．

布地の断片．写本に，厚手の亜麻織の，褐色の布地断片が添えられている．布地は，亜麻布の大きな断片から切り取られている。布地は，上端では加工されており，横と下端は加工されておらず，痛んだ素材のほころびた裾が巡っている．断片の形は，不規則な五角形である．周りの寸法は 32.2 × 25.6-26 cm である．肉眼で見ると布地は 2 つの部分に分けられる．右（五角形の，約 8-9 cm の幅の）にはテキストの行の残りが姿を見せる．それは現在では完全にわかるものではなく，破れが存在している．左（長方形の，約 20.5-23 cm の幅の）には，大きめの文字 10~12 字詰の 4 行のテキストが書かれ，あまり大きくない破れがある．一部の形，その寸法，そしてまた別のデータは，布地が装丁用に補強されたということを物語っている（以下を見よ）．

保存状況は良好である．布地は皺になっており，ひだと破れがある．

図 2　冊子の二折紙の構成図[(9)]



(9)　仮の図画に示される，契丹大字のテキストの見本は，写本 N176 の 37 頁，46 頁（冊子 4 冊目の最初の二折紙）から引用した．

図 3　装丁の内側（図）

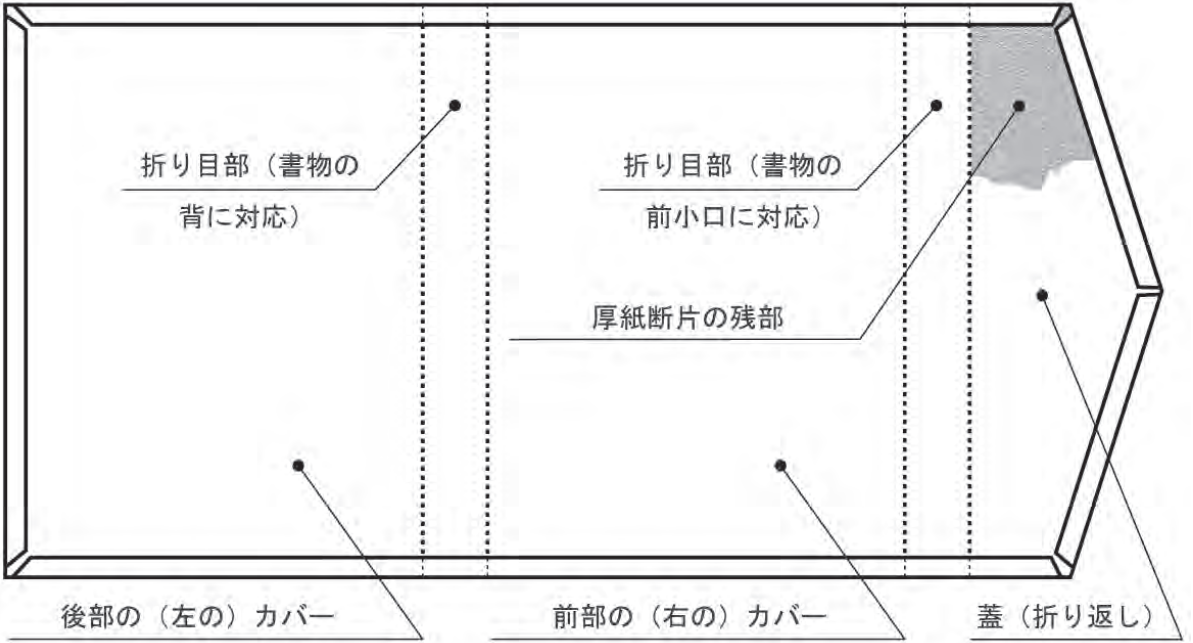
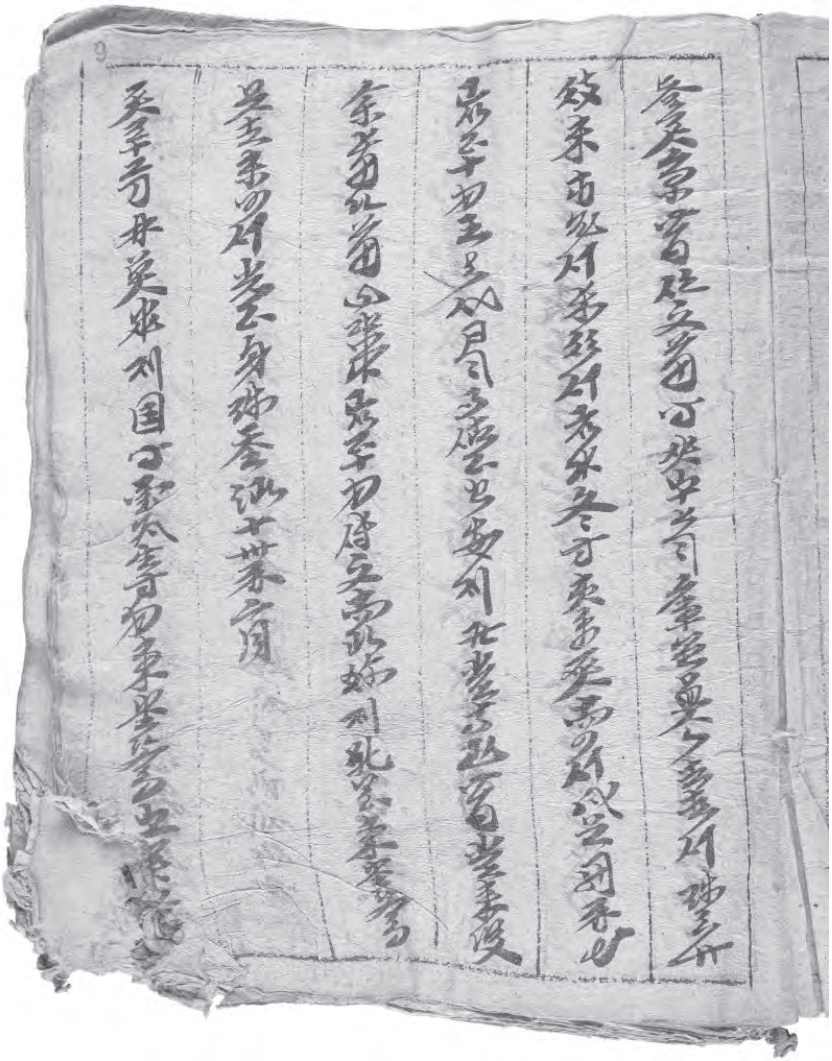

折り目部（書物の
背に対応）
折り目部（書物の
前小口に対応）
厚紙断片の残部
後部の（左の）カバー
前部の（右の）カバー
蓋（折り返し）

図 4　写本 N176（フォンド <Nova>，整理番号 No. 1055），9 頁目



© ロシア科学アカデミー東洋文献研究所

表 1　写本 N176 の数量的な特徴

対象	二折紙の数	頁数	頁の，便宜上の丁付け	注
冊子 1	6	12	1-12	
冊子 2	6	12	13-24	16-17 頁では罫線を欠く．
冊子 3	6	12	25-36	
冊子 4	5	10	37-46	41-42 頁では第 6 の二折紙を欠く（？）．綴じの上の部分で，（本来の第 6 の二折紙であった）紙の小さな断片が残っている．
冊子 5	6	12	47-58	
冊子 6	6	12	59-70	
冊子 7	5	10	71-80	72-73, 78-79 頁では第 3 の二折紙を欠く（？）．
冊子 8	6	12	81-92	
冊子 9	6	12	93-104	
分冊子	4.5	9	105-113	（104-105, 113 頁の間の，冊子の外側の紙）第 1 の二折紙と，112-113 頁の間の第 3 の二折紙の右半分（その左半分は 106 頁）は欠けている（？）．113 頁の裏面にはテキスト 113 頁が続いているが，枠と罫線は無い．
分かれた二折紙 1	1	2	二折紙 1	右半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），左半分には雑な筆跡で 6 行，それらから中央の 4 行は短く詰められていて，それらの上にはっきり，大きな文字 が書かれている．(10) 右上の角に 2 文字，枠と罫線は無い．

(10)　{翻訳者注・原著者による付記：この大きく書かれた文字は，契丹小字の  <ju.ai.úr>（ケイン 2009, p. 52: No. 2.147, p. 49: No. 2.122, p. 46: No. 2.097）であるかもしれないし，契丹小字から借用された契丹大字の 1 文字（言い換えれば，契丹大字の 1 文字になった，元来は契丹小字で書かれた語）であるかも知れない．それが契丹小字の結合形であると証明されるか，本資料のテキスト中の契丹小字あるいはその部分が発見されるなら，それは極めて重要な発見となるであろう．契丹大・小字の混在するテキストの例は現在まで発見されていないためである．}

				裏面：より折目に近い右半分には，雑な筆跡で短く詰められた 4 行があり，それらの上にはっきり，大きな文字  が書かれている．枠と罫線は無く，左半分は白紙である．
分かれた二折紙 2	1	2	二折紙 2	51-52 頁（冊子 5）の間で発見された．左半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），右半分はテキスト無し（しかし枠と罫線あり），裏面は白紙．
分かれた二折紙 3	1	2	二折紙 3	51-52 頁（冊子 5）の間で発見された．右半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），左半分はテキスト無し（しかし枠と罫線あり），裏面は白紙．
分かれた二折紙 4	1	2	二折紙 4	51-52 頁（冊子 5）の間で発見された．紙半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），裏面は白紙．
分かれた二折紙 5	1	2	二折紙 5	紙半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），裏面は白紙．
分かれた二折紙 6	1	2	二折紙 6	紙半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），裏面は白紙．
分かれた二折紙 7	1	2	二折紙 7	左半分に通常のテキスト（枠と罫線あり），右半分には雑な筆跡で大きい文字 4 行，枠と罫線無し． 裏面：左半分は雑な筆跡で大きい文字 5 行と不完全な 2 行 —— 小さく，枠･罫線は無く，右半分は白紙である．
布地断片	－	－	－	表側：左の部分には雑な筆跡で大きく 4 行，右には，かろうじて識別できる行の痕跡，別々に残っている，いくつかの，細かい文字．内面は白紙．
総計	63.5	127	－	冊子 113 頁＋分かれた二折紙 7 ＋布地断片に 1 テキスト．

装丁．写本は，皮革製の，褐色の装丁に収められており[11]，装丁は薄い浮き出し模様で覆われている．端は内側の面に折られて（皮を折り曲げられて）いる．前の方のカバーは，不規則な五角形の垂れ蓋（折り返し）を持ち，それは後ろのカバーの方に折れ曲がっている．装丁には 2 箇所折目がある：1 つ目はカバーの後部と前部の間，2 つ目はカバー前部と折り返しの間（**図 3** を見よ）である[12]．

装丁の寸法は 51.6-52.1 × 26.4-26.9 cm，カバーの後部と前部の幅 18.4-19 cm，折り返し 8.8-9.1 cm，折目 2.5-2.9 cm である．

内側には，折り返しと装丁のカバーの形に合致する，重層的な厚紙の断片が接合される．それらはある程度保存される：装丁から分かれた 3 つ，折り返しの上の部分に貼られた 1 つである．分かれた断片の形とそれらの寸法は，それらが，カバー前部（19-19.2 × 27-27.8 cm）[13]そして折り返し（7.25-7.35 × 20.5-20.75 cm 及び 9-9.1 × 20.5-20.6 cm）に属していることを明らかにする．カバーから剥がれた断片は 2 つの紙からなり[14]，互いに重ねられて，縦に半分に折り曲げられて，糊で接合された．その結果できたのが，紙の 4 層の厚紙である．折り返しから剥がれた断片は，より薄く，2 つの紙が貼り合わされて作られているが，継ぎ目については互いに，4 層のように，重ねられていた[15]．厚紙とし

(11) より正しくは，まるで写本は装丁に「包まれている」ように見える．

(12) もし装丁を 180 度裏返しにしたら，カバーの用途も逆になろう．右は前部になり，左は後部になる．提案されるカバーの配置（**図 3**）は，布と厚紙断片の装丁との接合の，筆者の再構成に基づいている．

(13) 具体的な蓋の断片の属性は，厚紙の窪みにより筆者に究明された．（その窪みは）装丁の皮の隆起と緊密に接触した結果生じたものだ（前方蓋の右部分を見よ）．この窪みは，厚紙断片が蓋に当てられた位置の正確な場所，また装丁と触れ合った側を判断することを可能にする．

(14) 興味深いことには，これらの紙の様式は，冊子の二折紙の様式と寸法が近く，一方紙は（色合いと触れてみてで）冊子の紙とあまり似ていない．

(15) 折り返しからの厚紙の断片の相互配置と，その装丁との接合場所は，その形から明らかになるだろう――全ての面の正確な一致は，断片が互いに完全に重なり合うことによってしか起こらないし，角の一致は折り返し下部に付ける際にしか起こらない．さらに，上部に位置した断片はそれを覆った布地の痕跡の存在で容易に判断できる．片方の（「下の」）断片には，その痕跡がしかるべく欠けている．

て貼られた紙は，所々は層に分かれていた．それゆえ，それらが 2 つのさらに薄い紙からなっていたことが予想できる（すなわち 8 層）[16]．

厚紙に上から接合されているのは，残存する布地断片である．次の事実がそれを物語っている：1）布地断片の寸法と形は，折り返しから後ろの方のカバーまでの，装丁の区域の寸法と形（後ろカバーの約 2.8 cm の帯状部分がそれに覆われる）と一致する．2）布地には，垂直な帯のように見える装丁の 2 つの折目から痕跡を見て取ることが出来，一方厚紙のより上層の断片には，布地の生地の痕跡を（見て取ることが出来る）．3）装丁のカバー前部と，そこから剥がれた厚紙の断片は，布地の破れた跡と合致する損傷があるのである．もし筆者の「構成」の再現が正しければ，つまり，布地断片の左に書かれたテキストが，冊子（写本書籍）束の最初の紙に接するなら，すなわちそのテキストは写本の冒頭（その題名）であろう．

装丁の保存状況は悪くはないが，皮は湿気で反っており，破損，すなわち破れもある．厚紙の断片は，カバーから分かれて，皺になっている．

アラビア語写本の専門家，V. V. ポローシンは，装丁はケースとして使われたもので，本来決して当該の写本（綴じ本）に属するものではない，という推定を述べた．このような装丁は，彼の意見では，イスラム風の文字書籍伝統に典型的なものであり[17]，豪華で高価なもので，その上，装丁自体が（刊行も含めて）関心を持たれるものである．筆者は別の点から，装丁と冊子のブロックの，湿気の影響による寸法の変化について補正を行うなら（冊子のブロックはより厚みを増したのに，皮は縮んだ結果，装丁の折り返しは今や，カバー前部まで完全に「届く」わけではない），それらは互いに合致――それらの寸法全てが相互に関連する，という推論を導き出すに到った．例えば，装丁の

(16) 例えば，厚紙の断片では，折り返しに貼り付けられて，紙 5 枚（層）――普通の紙 3 枚（「厚手の」）と，より先に 1 枚紙を構成する，もっと薄い紙 2 枚――を数えることができる．

(17) ハリドフ 1985, p. 178，ハリドフ 1987, p. 294，エランスカヤ 1987, p. 55，スルタノフ 1987, p. 487，カジエフ 1977, pp. 319-322 を見よ．装丁についてはカジエフ 1977, p. 145, イラスト 57，エッチンハウゼン 1959，図表 4, 6-9 も参照せよ．

折目の幅は，冊子のブロックなどの厚みに合致する．また，この装丁が本来，写本に属していることを指し示す，もう 1 つの証は，写本と同じ種類のテキストが書かれている，厚紙に結びついていた布地断片である．厚紙と，写本の紙の相似に着目すると，皮の断片と，上の縫い合わせ部分で，冊子のブロックが装丁に結び付けられていることも指摘できよう．このように考えると，装丁の帰属に関する問題はまだ検討の余地がある．

3. 写本書籍の製作技術

当該の写本書籍の製作技術，すなわち冊子における紙のまとめ方，そしてその次の綴じる方法は，完全には明らかではない．解決が必要な，いくつかの問題を取り上げると，1）白紙面（裏面）で，2 つの隣り合う二折紙は接着されたか，2）どの段階で，またどのように枠と罫線が書き入れられたのか，3）いつ写本書籍を構成する冊子が縫われたのか：テキストが書かれるまでにか，あるいは後にか．

（以上の問題を除くと）概して，製作技術は次のように示せる：二折紙には，冊子となる際に 2 頁分のテキストを書くために使用される，枠と縦の罫線が引かれる．二折紙の反対の面は白紙のままである．このようにして準備された紙は，たがいに白紙面で重ねられ，縦に半分に折り曲げられ，ヨーロッパ風の「構成」を持つ 1 冊の冊子を形成する．用意の整った冊子は，3 本の太い糸によって折り目部分で，上，中央，下の三箇所で，内側から縫われる．これらの糸で，冊子の組はそれら自体の間で連続して接着され（縫いとめられ）る．明らかに，初めに第 1 の冊子が縫われて[18]，その後で，同じ糸が次の冊子を通り（そしてこのようにして，その前の冊子と繋ぎ合わされる）……等々のように，縫われていた．糸の終端は，綴じ目（背）の所か紙の間で縛られていた（**図 1** を見よ）．

紙の接着．写本には，1 箇所（89-90 頁）でのみ 2 枚の二折紙が糊付けされている．その上，貼り合わせの方法は，紙の上･下の 2 点において，糊（接

(18)　それは綴じ本の最初の冊子であるか，最後の冊子であろう．

着するもの）が不揃いに付けられているのが，奇妙な印象を与える．紙の残りの部分では，糊の跡は見つけられていない．理論的には，外的な要因の影響により，貼りあわされた紙が分離されることはもちろんありえるが，A. P. テレンチェフ - カタンスキーが指摘しているように，「極東，中央アジアの写本の紙を貼り合わせた糊は，極めて丈夫なものである．敦煌で発見された一部の写本は，裂かれてはいるものの，紙の結合部はめったにはがれてはいない」（テレンチェフ - カタンスキー 1981, p. 26）．これに基づくと，写本に使用される二折紙は，それ自体の間では接着されていなかったと考えられる．そのことは，ある紙（113 頁，分かれた二折紙 1, 7）の裏面にテキストが書かれているということからも間接的に立証される[(19)]．指摘しておかねばならないのは，極東の写本，及び初期刊本のレパートリーにおいては，紙が糊づけされたものも，糊づけされないものも見出せるということである（メーンシコフ 1984, pp. 87, 89，クチャーノフ 1988, pp. 389-390）．

枠と縦の罫線. 枠と罫線のもたらす技術に関しては，さらに将来的な調査を要する．ある場合には，枠と罫線は印刷されていたようである．そのことは，多くの行で見られる特徴的な「空欄」によって証明される．別の例では，枠と罫線は手書きされ，定規か型板に沿って筆で書かれた印象を与える（53 頁）．いくつかの紙に存在するのは，繋がっていない，または雑に繋げられた線への筆の「なぞり（加筆）」であり，例えば，角，描かれた枠の水平線，端の方の罫線の縦線（62-63, 78, 107 頁）である．

おそらく，縦の罫線を伴う枠は，木版印刷に採用されたような，板（状のもの）に刻みつけられていたものではなかった．それどころか，枠はまるで，その細部が総じて固定されて（一定して）いないように見える．例えば，珍しくないケースは，罫線が枠の境を越えたり（95 頁），全く，水平線が縦線の境を越えていたり（35, 57, 59 頁），あるいはその境まで到っていない場合（18, 36, 41 頁）である．写本のいたるところで，同一頁の範囲でさえも，縦線は互い

(19) 113 頁，分かれた二折紙 1, 7 の裏面にテキストが存在することが説明するのは，それらが本の最初であるか最後であるかである，つまり，この事実は，残りの紙の貼り合わせに関する問題の解決には，原則にならないということである．

に異なる間隔で配される，ということも付け加えておく必要がある．

おそらく，水平・垂直な線は，別々に書き込まれたのであろう．写本の隣り合う 2 つの頁で，水平線はあるが縦線が欠如することがある（16-17 頁），という事実がその証拠である．これらは異なる二折紙に属する連続した頁であるから，枠と罫線は，既に出来上がった冊子に記入されたと考えられる．さもなければ，半分にしか枠が無い 2 つの二折紙が，冊子において隣り合って現れる理由が分からない．

結論としては，枠と罫線がどのように書かれたのか明らかにする必要がある：1）一度にか，あるいは順々にか，2）2 頁（見開き）に一度にか，1 頁にだけか，3）まだ縫われる前，冊子になっていない状態の二折紙においてか，それとも縫われた冊子に直接にか，4）冊子が用意された段階でか，（テキストの）書き手自身によるものか．

綴じ本の冊子の縫い方．冊子は，その中の紙が結ばれている糸と同じ糸で縫われているから，この縫いはどの段階で行われたかという，当然の問題が生じる．もしテキストが書かれた前に縫われたとすれば，それが意味するのは，この文章が紙に占める容量が予め知られていた，すなわち他の文献から写された，ということである．もし縫うことがテキストの記入の後に行われたのなら，どのように記入が行われたのか明らかにしなければならない：頁の進行に従って（折り曲げられてはいるが，しかし冊子として縫われていない，冊子にする目的で用意された紙に）か，あるいは二折紙の見開きにおいてか．頁の進行に従って書かれたことを示す，はっきりとした証拠は，左右半分の文章の筆跡が異なる頁が存在することである（81 頁と 92 頁，93 頁と 104 頁，94 頁と 103 頁）．異なる二折紙において，これらの別々の筆跡が一致することは，構成された冊子においてのみ自然に思える．または，このように構成する前に，先に開いた状態の紙に（前もって）書くことは困難であると指摘したい[20]．

(20) 2 つの異なる，互いに結び付けられない，同時のテキストの断片化を記述すること，それに加えて，それらが冊子の「ひだ」のもとで 1 つになっていたことを提示することは難しい．これはおそらく，清書において，原典がそのような二折紙に記されている場合のみ可能である．

4. 写本テキストの完全性

現段階で，写本の考察により，テキストの構造とその完全性に関する結論を導き出すことは可能ではない．写本はばらばらになっていて，それゆえ，写本が巻頭・巻末を有するか，その紙全てが保存されているか，は明瞭ではない．まず，縫われた冊子の束と，分冊子と，完全でない二折紙との，結びつきを明らかにし，その他，失われた部分の可能性もあきらかにしなければならない．思うに，それらの課題を上首尾に解決するのは，テキストの通読，その内容の研究，隣り合う頁の文字の連続の分析[(21)]，向い合う紙の接触で生じる，鏡文字（インク・墨の写り）の痕跡の調査，である．

冊子がよりしばしば，6 つの二折紙からなることに基づけば，仮説としては，冊子 4 の 6 枚目の二折紙[(22)]，冊子 7 の 3 枚目の二折紙，分冊子の 1 枚目の二折紙（全て）と，分冊子の 3 枚目二折紙の右半分（**表 1** を見よ）の喪失を予想できる．冊子 4 の紙の喪失を間接的に物語るのは，41-42 頁の間の上の縫い合わせ箇所で，紙の小断片が残っている，ということである．紙が，書き手自身により抜かれたかもしれないことも，考慮する価値がある．

分かれた二折紙に関して言えば，冊子から破り取られ（その「喪失」となった）か，冊子がほどかれ分離したかが，予想できた．それを指摘するのは，全ての分かれた紙に存在する，折目の部分の損傷である．その際，それらの破損の特徴は一様ではなく，二折紙 1 と 7 がむしりとられた（何かしらの冊

(21) 隣り合う頁の，文字の連続の分析は，本の実際のどの場所に，分離した紙が所属していたかという，正しい順序関係の解明の間接的な方法となる．方法の要点は，1 つの頁の終わりの文字と別の頁の始まりの文字の組み合わせが，本文中で「一緒に」対面するような，2 つの繋がる頁の選別にある．このためには，認められた，合わさる組み合わせを含む文字が多ければ多いほど，頁の連続の正しさの可能性は高くなる．この方法は常に正確ではないとはいえ，範囲を大きく限定することができ，ある場合にだけ，それはテキストの分離した部分の順序を再現することに役立つだろう．例えば，テキストが知られていない文字（の組み合わせ）で書かれる時，その部分の接合は，理論的にはありえない．この方法を修正し，筆者は，文字の特徴の確定のために利用する（「**5．写本の言語と文字**」を見よ）．

(22) 冊子の最初の二折紙として，筆者は外側の紙を認め，最後の（この場合 6 枚目の）紙として，内部の紙を認める（**図 2** を見よ）．

子の，内側・外側の紙であろう）一方，残りはほどかれていた（ほどかれた冊子となった）．

5. 写本の言語と文字

写本は漢字風の表意文字で書かれる．文字の方向は縦書きで，上から下に書かれ，行は右から左に，である[23]．語の間の，また文の間の境界は認められず，印も欠けている．

写本 N176 は整理目録に「女真の」と書かれたにもかかわらず，その同定に筆者は疑問を持った．写本のテキスト中に見られる文字が，女真語の文に現れそうな文字と合致しないことが非常に頻繁なのである[24]．例えば，漢字の皿「容器，食器，生活用品」に近い形の文字 (10 頁 6 行目，29 頁 1 行目[25])は，女真語のテキストには確認されていない（金啓孮 1984, pp. 93-104 を見よ）．一方，別の頁では，写本中に女真文字の「文字素」が現れているようである．例えば非常に頻出する文字 (9 頁 3, 4, 5 行目)とその変異形(金

(23) 文字の方向は，何らかの知られた（テキストの他の場所で出現する）文字の組み合わせの，1 行の末尾から次の行への移行により判断でき，このような組み合わせを，筆者は二つ発見することができた：(a)14 文字（6 頁 4-5 行目と 9 頁 6 行目）(b) 7 文字（6 頁 5-6 行目と 4 頁 5 行目）．先に述べると，例 (a) の最初の 8 文字は契丹国の自らの国名を示している（**表 4** を見よ）．

(24) 漢語史料によれば，女真文字は 2 種類作られていた：(契丹文字風の）大字と小字である（清瀬 1977, p. 22，ケイン 1989, p. 3）．これらの文字の種類の性質は，長きにわたって議論の対象であった：我々の時代に現存する女真文字文献は大字に分類したり，小字に分類したりされた（清瀬 1977, p. 22，ケイン 1989, pp. 4-7，ペブノフ 2004, p. 44）．推定を述べたものは，文字体系は時が経って新しく変わった（ケイン 1989, p. 10），同様に一部のテキストの文字は混合の特徴がある，というもの．愛新覚羅の意見では，女真小字は，金・銀・木製の信任身分証（牌符）のテキストにだけ記され（愛新覚羅 2009a, pp. 27-39），「議論されるべき」文献は（混合されること無く）大字で書かれた（愛新覚羅 2009a, pp. 103-112）．本論では筆者は，筆者に受け入れられる，女真文字文献資料の全てを利用し，特別にこれらを分類することはしなかった．

(25) 括弧内のこの箇所と，さらなる出現箇所は，写本の，引用する部分で出会う，ある箇所だけ（全てではない）を指している．9 頁目の引用については，同様に **図 4** ―― そこで（当該の文字が）再出する ―― を見よ．

啓孮 1984, pp. 89-90，清瀬 1977, p. 66）である．これらの事実は説明を要する．つまり，新しく信頼できる証拠で支持することが不可欠なのは明らかである．ゆえに，写本の言語と文字の同定は，そうした調査を実施するまで，「不明」とみなされたのであろう．

****

写本 N176 の文字の比定は，文字が半草書体，しばしば草書体まで移行しているので，全体的に事例とその読み取りは著しく複雑なものと化している．そのような理由から，文字の分析は，容易に復元が可能な楷書体で書かれたものから始める．それは「国」の文字 （9 頁 6 行目）と「皇帝」の組み合わせ文字 （1 頁 3 行目，4 頁 4, 5 行目）で，言うまでもなく漢字からの借用であり，当該の場合，それらの「ありうるべき」意味が暗示される．ついでながら注目するのは，テキスト中でよく出現する文字から判断して，おそらく，写本は歴史的述作，あるいは公的な性格の文書であっただろう．

次の段階で分かったのは，別の言語の文字資料との相関性である．写本の文字と漢字の手書き書体の近親関係は明らかであるが，漢字はこの写本の文字としての可能性を排除される．写本は確実に，漢字で書かれているのではなく，また，大幅な変形を加えていない，漢字風の他の文字で書かれたものでもない（例えば，表意文字で書かれたドゥンガン語のテキストではない）．ここから導き出されるのは，特に，テキストが漢語文語「文言」（日本の漢文，朝鮮の hanmun (한문), ベトナムの Hán văn）の，国ごとのどのような変容（文字）で書かれたのでもないことである．それに加えて，文字の線から，西夏文字，朝鮮文字（ハングル），日本文字，ベトナム文字チュノム（Chữ Nôm）[(26)] であることを排除し，一方その構成から，契丹小字（スタリコフ 1982, pp. 101-102，ケイ

(26) 除外される文字体系の一覧を挙げ続けるならば，それは何も原理的に新しいものをもたらさない．例えば渤海文字（李強 1982），または，漢字を元にして創製された壮（チュワン）象形文字（モスカリョーフ 1971, pp. 30-38）を見よ．

ン 2009, pp. 12-13）であることを排除する．そうした見地の証拠（決して，たった 1 つではない）として，例えば文字  （二折紙 7 の裏面 5 行目）を挙げることができる．これは上記のいずれの文字体系にも属していないのである．(27)

従って，可能性は 3 つ――写本は契丹語か，女真語か，筆者に未知の言語で書かれたか――までに絞れる．契丹・女真文字のレパートリーと，文字の分析のため選ばれた字形との相関，さらに，対応する言語で「国」・「皇帝」という語がどう書かれたかという，「逆の」比較によって，写本は契丹大字・契丹語で書かれたということが明らかになる（**表 2，3** を見よ）．(28)

この結論は一見したところ，とても信じられない，センセーショナルなもののように見えるかもしれないが，(29) 写本の言語と文字の，さらなる分析はその結論を裏付けた．筆者は多くの文字の組み合わせと，個々の文字を十分に選定することに成功した．その中に 1 つ，契丹大字の別の碑文で知られる，契丹国の名称を見い出すことができる（**表 4** を見よ）．(30)

---

(27) 筆者は，文字要素の中に，「同様な文字」が記録されていないとはいえ，意図的に女真文字を検討から外さなかった（金啓孮 1984, pp. 93, 115, 清瀬 1977, p. 91: No. 664-665, ペブノフ 2004, p. 212: No. V-149, p. 193: No. V-116 と比較せよ）．

(28) **表 2，3** の女真文字の音写は，金啓孮の辞書（金啓孮 1984）で提示された音韻再構成により，**表 4** は愛新覚羅 2009a による．**表 2，3** の契丹文字の音写（あるいは翻字というのがよいか）は，D. ケインの最近刊行された専著（ケイン 2009）により，**表 4** は愛新覚羅 2009a による．その他の研究もできる限り参照している．

(29) 遼国には書籍印刷が存在した（テレンチェフ - カタンスキー 1981, p. 85）とはいえ，契丹語（契丹大字であれ契丹小字であれ）による本の 1 冊も我々には伝わっていない．研究者はこれを，遼の国境を越えて契丹の書物を運び出すことを，死刑の恐怖の下，禁止したことと関係づける．そのため E. I. クチャーノフはこう書いている：「女真の侵攻による大火の炎で，契丹の書庫が消失したことは，契丹独自の文学の永久の消失であった」（クチャーノフ 1968, p. 8）．そうした禁止の存在を伝えるのは沈括（11 世紀）『夢渓筆談』である：「契丹書禁甚厳，伝入中国者法皆死」（『夢渓筆談』巻 15，p. 513）．

紙に書かれた契丹テキストについていえば，ベルリン・トゥルファンコレクション契丹部分で発見された，契丹大字（7 文字）のあまり大きくない断片が知られている（請求記号 Ch 3586，王丁 2004 を見よ：断片のデジタル画像は IDP データベースに基づくオンラインで閲覧可能である）．

(30) 契丹大小字の墓誌資料における，時代的な相違の中の契丹国の名称の変異について，より詳しくは，愛新覚羅 2009a, pp. 199-200 を見よ．

表 2　異なる文字による「国」という語の書き方

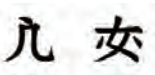
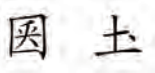
N176 9 頁 6 行目：  **図 4** を見よ	契丹大字：  *gur（ケイン 2009, p. 167, 179: No. 5.069）  漢語からの音借用 *gui（ケイン 2009, p. 173, 179: No. 5.050）
	契丹小字：  g.úr（ケイン 2009, p. 75: No. 2.234, p. 46: No. 2.097）  漢語からの音借用 g.ui（ケイン 2009, p. 75: No. 2.234, p. 66: No. 2.262, p. 173）
	女真文字：  guru-un （金啓孮 1984, pp. 122, 62，清瀬 1977, p. 98: No. 032， ペブノフ 2004, p. 248: No. 98，愛新覚羅 2009b, p. 206）  漢語からの音借用 gui は語連続「gui ʃĭ wə-ə」（国史院）の場合 （金啓孮 1984, p. 88）， guei は語連続「gia-an çiu guei ʃĭ」（兼修国史） の場合（金啓孮 1984, pp. 138, 183）

表 3　異なる文字による「皇帝」という語の書き方

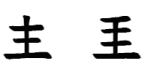
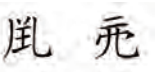
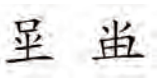
N176 4 頁 4 行目： 	契丹大字：  hoŋdi（ケイン 2009, p. 173, 179: No. 5.070, No. 5.071）
	契丹小字：  hoŋdi（ケイン 2009, p. 74: No. 2.328, p. 43: No. 2.075）
	女真文字：  xɑ-(g)ɑn（金啓孮 1984, pp. 191, 9, 清瀬 1977, p. 112: No. 272, ペブノフ 2004, p. 337: No. 478, p. 468: No. I-1） 可汗「ハン，カガン」（愛新覚羅 2009b, p. 206）  漢語からの音借用 xuɑŋ-di（金啓孮 1984, pp. 122, 140, ケイン 1989, p. 34）

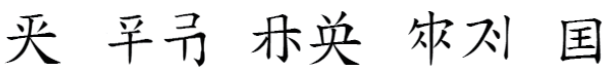
表 4　契丹国の名称

N176
9 頁 6 行目：

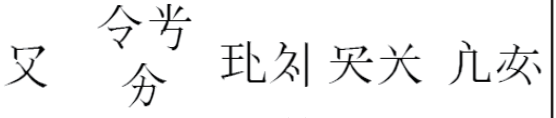


図 4 を見よ

契丹大字によって書かれた，契丹国の名称：



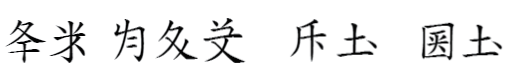
契丹小字で書かれた同様のもの：



音写：	mos	diau-d	huldʒi[31]	kitai	gur
漢字：	大	中央	胡里只	契丹	國

訳：　大中央 huldʒi 契丹国（劉鳳翥・唐彩蘭 2003, pp. 75-77, 89；劉鳳翥 2006, pp. 52-54；愛新覚羅 2009a, pp. 166-167, 192-193）

金国の名称を書いた女真文字との比較：



音写：	amban	duliŋgi	altʃun	gürün
漢字：	大	中央	金	國

訳：　大中央金国（愛新覚羅 2009a, p. 43）

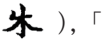
(31)　発音と意味は正しくは確立されていない．huldʒi の再構成は愛新覚羅の推定であり，当該の契丹語はモンゴル語の ulus「国家，人，民族」とより一般的な同源語根であると思われる（愛新覚羅 2009a, pp. 191-201，ulus の同源語については同様にナジップ 1979, pp. 362-363 を見よ）．ケインの再構成＜ GREAT t.iau.dû xu.rå qid.i gúr ＞と比較せよ（ケイン 2009, pp. 162-165）．

論文で言及した文字は全て，やはり契丹大字の手書き体に現れる：（愛新覚羅 2009a, p. 304），（ケイン 2009, p. 179: No. 5.067），（ケイン 2009, p. 180: No. 5.107）．

その上，筆者は一つの日付――重熙 14 年 2 月，つまり西暦 1045 年 2~3 月，を抽出することに成功した（**表 5** を見よ）[32]．おそらく，あらゆる部分が読まれ，理解された後に，これによって写本の成立時期の日付を決めることが可能になるだろう．

日付の最初の文字は，それ自体で「天」という要素を示し，その比定に疑いは無い．第 2 の（第 1 の文字と組み合わさる）楷書体は，碑文資料から筆者に選び出され，両文字を「重熙」という年号のように読む可能性を与えた．契丹文字文献に見出される，契丹皇帝統治（時代）の年号の全ては，「天」または「大」の要素から始まる（ケイン 2009, p. 158）ことを改めて指摘しよう．また，それらの文字表記はすべてのものが明らかにされているわけではない．これを考慮に入れると，別の方法による解読――すなわち，テキストに出るような，「少なくとも 14 年」の期間を持つ，年号を抜粋すること――も提議できる．そのような選別の結果も，**表 5** に示される．それらが第一段階の解読を立証する（重熙の年号は 23 年続いた）とはいえ，それはおおよその指針であり，ただ 1 つの選択肢を示すわけではない．年号の，指定された基準に当てはまるものの中で，「応暦」，「統和」（，

(32) 中国暦の日付の，西洋暦（グレゴリオ暦）への変換は，『両千年中西暦対照表』の表により行われたが，『両千年…』における（1582 年 10 月 15 日までの）ユリウス暦の日付は，内田 1975 を元にして適宜グレゴリオ暦に直した．李崇智 2001 と栄孟源 1956 から同様のデータも使用している．

，「重熙」（，）そして「大定」だけが，契丹大字のテキスト中に記録されており[(33)]，残りの（年号の）文字の字形はまだ知られていない[(34)]．

個々の検討に適当なのは，契丹大字の線描である．写本の中にある文字の書かれたのを，碑文資料に類似して書かれたものと，若干異なること（**表 6** を見よ）に気付くのはたやすく，その上，これらの相違は文字のスタイル（写本における草書・半草書，碑文における楷書）とは結び付けられない．

(33) 「統和」，「重熙」の年号は，叢艷双他 2005, p. 55，8, 10 行目，劉鳳翥 2006, p. 67，8, 10 行目，劉鳳翥 2010, p. 415，7, 11 行目，p. 416，19 行目，p. 417, 15 行目を見よ．「応暦」,「大定」の年号は, 痕得隠太傅（960 年）や李愛郎君（1176 年）の墓誌のしかるべき箇所を見よ．残念ながら，筆者はまだ（痕得隠太傅墓誌や李愛郎君墓誌の良い拓本を）実見できなかったし，研究もできなかった．

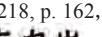
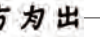
(34) 女真の年号「天会」と「大定」は，契丹小字文献に記録される．ともに「天」の文字要素から始まる：「天会」 と （ケイン 2009, p. 65: No. 2.254, p. 161，清格爾泰他 1985, p. 124），「大定」（ケイン 2009, p. 61: No. 2.218, p. 162, 清格爾泰他 1985, p. 122）．D. ケインは「大定」の年号の別の表記  —— 最初の文字要素「大」をともなう（ケイン 2009, p. 80: No. 2.373，組み合わせ  清格爾泰他 1985, pp. 319, 569 と比較せよ）を例に挙げる．

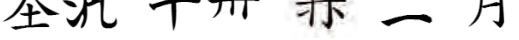
表 5　日付

N176
9 頁 5 行目：



図 4 を見よ

契丹大字で書かれた日付：



漢字：　重熙　十四　年　二　月

訳：　［遼興宗］重熙 14 年 2 月
（西暦 1045 年 2 月 26 日－ 3 月 27 日に相当する）
（ケイン 2009, pp. 170, 174, 177, 182: No. 5.206 と比較せよ）

（14 年以下ではない）
統治活動の長さによる，遼，西遼，金皇帝治世の年号抜粋：

国	**「……14 年 2 月」**	**統治者**　諡（個人の名）
遼	応暦＝ 964 年 3 月 22 日－ 4 月 19 日	穆宗（耶律璟）
	統和＝ 996 年 2 月 27 日－ 3 月 26 日	聖宗（耶律隆緒）
	重熙＝1045 年 2 月 26 日－ 3 月 27 日	興宗（耶律宗真）
西遼	祟福＝1177 年 3 月 9 日－ 4 月 7 日	承天后（耶律普速完）
	天禧＝1191 年 3 月 5 日－ 4 月 2 日	末主または末帝（耶律直魯古）
金	天会＝1136 年 3 月 12 日－ 4 月 9 日	熙宗 （完顔亶あるいは完顔合剌）
	大定＝1174 年 3 月 12 日－ 4 月 10 日	世宗 （完顔雍あるいは完顔烏禄）

表 6　字形の比較表

写本の字形	再構成された楷書体	碑文資料で知られる字形
	平	旱　平
	弓	弓
	忠	悆　忠
	刘	刘　列　刘
	皿	皿　皿
	汎　汎	汎　汎　汎 汎　汎　汎

筆記の変異からわかることは，正書法的規範が保たれず，時を経るに従って，ある文字の線描の自然な変化（革新）（が起きたこと）を物語っているだろう．我々は今のところ，契丹文字草書の別の規範を得ていないので，書き手の筆跡の個人的特徴のため，または書き手の，書き方の正確さの認識などのため，草書における楷書体の「ありうる」崩し（不正確さ）[35]という可能性も排除できない[36]．

検討されている文献は，契丹の言語と文字の検討のための重要な資料であることは全く明白である[37]．墓誌テキストと性格の異なる，契丹大字の十分な量のテキストが，研究者に初めて委ねられた．しかし，事態が問題化するのは，写本が楷書で書かれたのではないため，それゆえ，「規範的な」字形の再構成という，予備的な大作業が不可欠であることである．これらのために，次のような手順が定められよう．１）契丹文字で書かれた，有名な文献全てを用いて，契丹大字のコンコーダンスを編纂すること[38]．２）写本のテキスト中で，楷書体を再構成しやすい文字とその組み合わせを選出すること．３）使用された文脈（実際には直近の環境，つまり前後の文字）を明らかにするため，文字のコンコーダンスでの，こうした組み合わせを精

(35) 「ありうる（許容できる）」とは，そうした誤りを，草書体における文字の線描ということができる．それは，（正しく）読み書きのできる読み手に，書かれているものを読み，理解することの妨げにはならず，一方同様に，筆画が誤っているという感じを彼らに惹き起こすことはない．

(36) 規範からの逸脱と，書き手の個々の能力･素養に関連した，誤った筆記に関しては，アミロヴァ 1975, pp. 329-332, アミロヴァ 1977, pp. 141-147 を見よ．

(37) 契丹大字は（契丹小字と異なって）事実上解読されていない．知られているのは個々の文字とそれらの組み合わせの知識であり，完全には，テキストは読まれていない．より詳しくは，ケイン 2009, pp. 167-184 を見よ．

(38) 漢語史料の情報によれば，契丹大字の数は数千に達する．例えば，葉隆礼の『契丹国志』（1180 年）から次の二節を見よ：「[丙戌天贊六年]【これは史料の誤りで，「五年」が正しい（原著者注)】渤海既平，乃製契丹文字三千余言」；「漢人教之以隷書之半増損之，作文字数千，以代刻木之約」（『契丹国志』巻 1, p. 7, 巻 23, p. 221-222）{翻訳者注：原著者の要望により，原書とは出典を，ロシア語訳学術出版物から中国の学術出版物に変更している}；(『遼史』巻 2, p. 16,『新五代史』巻 72, p. 888 と比較せよ)．

査すること．4）写本テキストによる，楷書の隣り合う文字の再構成のため，文字の組み合わせと，その前後の直接の環境のコンコーダンスに見出される，「逆の」相関に注目すること．楷書体の字形が再構成される文字が多ければ多いほど，研究に利用しうるテキストの断片は長くなり，加えて，現時点で分かっている個々の部分から，テキストのおおよその内容を再構築できる公算も高くなる．

6. 結び

論文においては，次に提示される 3 つの問題が解決された：1）未知の写本についての記述，2）綴じ本の製作技術，3）写本の言語と文字の確定，である．最初に示されたのは，テキストと紙の特色，文献の外面に関する詳細な記述である．第 2 の問題に臨む作業の過程で生じた多くの問題は，現段階では，部分的にしか解決され得なかった．従って，全てに先だって，将来的な研究のための課題が示された．その詳細な検討が，写本の製作の原理を説明し，そしてまた，本の特徴を明らかにすることを可能にするだろう．言語と文字の問題と関連する，3 番目の課題の解決が，論文の主要な結論――写本は契丹大字による契丹語で書かれている――である．

写本が契丹人に属するものかどうかは，間接的に，それが何処からモスクワに持ち込まれたのかという出土地も立証する．結局のところ，現在の地域，カザフスタン，ウズベキスタン，タジキスタン，キルギスタン，新疆ウイグル自治区に位置していたのは，中国史においては西の遼（西遼）の名で，あるいはイスラムにはカラ・キタイ国（カラ・キダン，黒い契丹）[(39)]として知られている西方の契丹国なのである．国家は，女真国による遼壊滅（1125 年）の後，契丹の西に逃亡を先導した耶律大石により建国され，モンゴルの侵略（1218 年）に至るまで存続した．

(39)　地図はピコフ 1989, pp. 54-55，ビラン 2005, pp. 220-221 を見よ．

M. ビランはこう書いている．西の契丹国は，言うまでもなく多言語（の国）であり，その国民は自らの（もとの契丹の）文字も忘れていなかった（ビラン 2005, p. 127）．これが意味することは，写本が，契丹の「終末」に先立ち，自身のかつての帝国領から「持ってこられた」ものではなく，西遼で直に作られた，ということである．熱心な調査に値するのは，極東の書籍には無縁の伝統の，皮装丁である．もし，それにもかかわらず，皮装丁が本に属するものであるなら，我々は文化的な統合を目にしているのであろうか．中華文明の影響で形成された文化の民族によって，イスラムの拡大圏にある領域で築かれた西遼国では，極東の書籍の伝統が中央アジアのものと統合されたのではなかろうか[40]．

最後に，私は将来，写本の歴史をはっきりさせ，写本の発見の場所と事情を探り出し，キルギスからモスクワ，それからサンクト・ペテルブルグへの写本の道のりの追跡調査をなしたいと考えている．それが分からない限り，慎重な推定しか述べることができない．例えば，当該の写本は全く，キルギス地域の考古学的発掘作業の過程で表に出た，発見の 1 つであったということはありえないことではない．ここで，A. N. ベルンシュタムの指導のもとで，1938~1941 年のキルギスにおけるチュイスク谷で実施された，セミレチェンの考古学探検で探し出されたものに関して，思い起こすこともできるかもしれない．その結果, カラキタイ文化の文献発見となったのだ[41]．その上, 1953 年に設立された，ソビエト連邦科学アカデミーのキルギス総合考古・人類学探検には，チュイスク考古隊も入っていた．それが主要な任務として任せられたのは，アク・ベシム廃墟の発掘を行うことであり[42]，1953~1954 年のフィー

(40) A. N. ベルンシュタムも，2 つの文化のこのような相互作用について，度々言及してきたが，それは考古学的な発掘調査の資料に基づいてであった（ベルンシュタム 1941, p. 99, ベルンシュタム 1943, p. 26, ベルンシュタム 1952, p. 171）．

(41) 『論集…』pp. 47-55, 139-140，ベルンシュタム 1952, pp. 168-172 を見よ．

(42) アク・ベシム廃墟のかなりの部分は，カラキタイ文化の痕跡であり，条件付きだとしても，A. N. ベルンシュタムに「契丹のブロック」と命名された（ベルンシュタム 1941, p. 96,『論集…』p. 47）．

ルドワークシーズン[43]，つまり写本がモスクワに入る直前に行われた[44]．私見では，今後の研究は，これらの課題，そして本論文で提起された別の問題の多くを，明らかにするだろう．

原書略号一覧

{翻訳者注：翻訳文では意味のないものだが，原文を参照する際，参考とされたい}

dv. l. = 二折紙
kit. = 漢語（漢字），漢語相当
l. = 頁
ob. = 裏面
otd. dv. l. = 分かれた二折紙
otd.tetr. = 分冊子
stk. = 行
tetr. = 冊子
transkr. = 音写
IDP = 国際敦煌プロジェクト

略記

『新五代史』=『新五代史』（〔宋〕欧陽修撰・〔宋〕徐無黨註）北京，中華書局，1974．第 1-3 冊．
『夢溪筆談』=『夢溪筆談校證』（〔宋〕沈括著・胡道静校證）上海，上海古籍出版社，1987．第 1-2 冊．
『契丹国志』=『契丹国志』（〔宋〕葉隆礼撰・賈敬顔，林栄貴点校）上海，上海古籍出版社，1985．
『遼史』=『遼史』（〔元〕脱脱等撰）北京，中華書局，1974．第 1-3 冊．

---

(43) クズラソフ 1959, p. 157 を見よ．
(44) 同様に注目すべき興味深いことは，1954 年 6 月から 1957 年の初めまで，ロシア科学アカデミー東洋文献研究所で活動していたのは，東洋の写本・刊本におけるキルギスの知識を探求し，翻訳するため，ソ連科学アカデミーキルギス支所として創立されたキルギスグループであり，その際，ある時期 D. I. ティーホノフがそれを指導し，彼の名のもとでモスクワから写本を移送した，ということである（アジア博物館… 1972, p. 376, クチャーノフ 2009, pp. 215-216）．

参考文献一覧

{翻訳者注：掲載順は原書と異なる．幅広い日本人読者に供したいという原著者の意見を尊重し，本文中の人名はカタカナ表記とした．史書等を除き，参考文献における人名は全て日本語読み50音順とした．}

愛新覚羅 烏拉熙春　Aisin Gioro Ulhicun

2009a:『愛新覚羅烏拉熙春女真契丹学研究』京都，松香堂書店．

2009b:『明代の女真人――『女真訳語』から『永寧寺記碑』へ――』京都，京都大学学術出版会．

アジア博物館…　Азиатский музей…

1972: *Азиатский музей — Ленинградское отделение Института востоковедения АН СССР*. Москва.

アミロヴァ　Амирова, Т. А.

1975: Некоторые вопросы фонологической интерпретации графики. In: *Очерки по фонологии восточных языков*, Москва, pp. 320-335.

1977: *К истории и теории графемики*. Москва.

内田正男　Uchida Masao

1975:『日本暦日原典』東京，雄山閣出版．

栄孟源　Rong Mengyuan

1956:『中国歴史紀年』北京，新華書店．

エッチンハウゼン　Ettinghausen, Richard

1959: Near Eastern book covers and their influence on European bindings: A report on the exhibition “History of Bookbinding” at the Baltimore Museum of Art, 1957-58. In: *Ars Orientalis*, Vol. 3, pp. 113-131, 20 pls.

エランスカヤ　Еланская, А. И.

1987: Коптская рукописная книга. In: *Рукописная книга в культуре народов Востока (Очерки)*, Vol. 1, Москва, pp. 20-103.

王丁　Wang Ding

2004: Ch 3586 — ein khitanisches Fragment mit uigurischen Glossen in der Berliner Turfansammlung. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited — The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Berlin, pp. 371-379, 465.

カジエフ　Казиев, А. Ю.

1977: *Художественное оформление азербайджанской рукописной книги XIII-XVII веков*. Москва.

清瀬義三郎則府　Kiyose, Gisaburō Norikura

1977: *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and Decipherment*. Kyoto.

金啓孮　Jin Qizong

1984:『女真文辞典』北京，文物出版社.

クズラソフ　Кызласов, Л. Р.

1959: Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-1954 гг. In: *Труды Киргизской археолого-этнографической экспедиции*, Vol. II, Москва, pp. 155-242.

クチャーノフ　Кычанов, Е. И.

1968: *Очерк истории тангутского государства*. Москва.

1988: Тангутская рукописная книга (вторая половина XII — первая четверть XIII в.). In: *Рукописная книга в культуре народов Востока (Очерки)*, Vol. 2, Москва, pp. 373-422, 476-477, 484-487.

2009: [История востоковедения в лицах:] Дмитрий Иванович Тихонов (1906–1987). In: *Письменные памятники Востока*, 2009, весна-лето, № 1(10), pp. 215-216.

ケイン　Kane, Daniel

1989: *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. Bloomington. (Uralic and Altaic Series; Vol. 153).

2009: *The Kitan Language and Script*. Leiden. (Handbook of Oriental Studies/Handbuch Der Orientalistik. Section 8 Uralic & Central Asian Studies; 19).

スタリコフ　Стариков, В. С.

1982: Прозаические и стихотворные тексты малого киданьского письма XI-XII вв. In: *Забытые системы письма. Остров Пасхи, Великое Ляо, Индия: Материалы по дешифровке*, Москва, pp. 99-210.

スルタノフ　Султанов, Т. И.

1987: Среднеазиатская и восточнотуркестанская позднесредневековая рукописная книга. In: *Рукописная книга в культуре народов Востока (Очерки)*, Vol. 1, Москва, pp. 478-504.

叢艶双他　Cong Yanshuang et al.

2005: 叢艶双，劉鳳翥，池建学「契丹大字《多羅里本郎君墓志銘》考釈」『民族語文』2005, № 4. pp. 50-55.

清格爾泰他　Chinggeltei et al.

1985: 清格爾泰，劉鳳翥，陳乃雄，于宝林，邢復礼『契丹小字研究』北京，中国社会科学出版社.

テレンチェフ - カタンスキー　Терентьев-Катанский, А. П.

1981: *Книжное дело в государстве тангутов (по материалам коллекции П. К. Козлова)*. Москва.

ナジップ　Наджип, Э. Н.

1979: *Историко-сравнительный словарь тюркских языков XIV века. На материале «Хосрау и Ширин» Кутба*. Книга I. Москва.

ハリドフ　Халидов, А. Б.

1985: *Арабские рукописи и арабская рукописная традиция*. Москва. (Культура народов Востока: материалы и исследования).

1987: Рукописная книга в арабской культуре In: *Рукописная книга в культуре народов Востока (Очерки)*, Vol. 1, Москва, pp. 241-300.

ピコフ　Пиков, Г. Г.

1989: *Западные кидане*. Новосибирск.

ビラン　Biran, Michal

2005: *The Empire of the Qara Khitai in Eurasian History: Between China and the Islamic World*. New York. (Cambridge Studies in Islamic Civilization).

ペブノフ　Певнов, А. М.

2004: *Чтение чжурчжэньских письмен*. Санкт-Петербург.

ベルンシュタム　Бернштам, А. Н.

1941: *Археологический очерк Северной Киргизии*. Фрунзе. (Материалы и исследования по истории киргиз и Киргизстана; Выпуск IV).

1943: *Историко-культурное прошлое Северной Киргизии по материалам Большого Чуйского канала*. Фрунзе.

1952: *Историко-археологические очерки Центрального Тянь-Шаня и Памиро-Алая*. Москва-Ленинград. (Материалы и исследования по археологии СССР; № 26).

メーンシコフ　Меньшиков, Л. Н.

1984: *Описание китайской части коллекции из Хара-Хото (фонд П. К. Козлова)* / Приложения составил Л. И. Чугуевский. Москва.

モスカリョーフ　Москалёв, А. А.

1971: *Грамматика языка чжуан*. Москва.

李強　Li Qiang

1982:「論渤海文字」『学習与探索』1982, № 5. pp. 113-123.

李崇智　Li Chongzhi

2001:『中国歴代年号考』（修訂本）北京，中華書局.

劉鳳翥・唐彩蘭　Liu Fengzhu & Tang Cailan

2003:「遼“蕭興言墓志”和“永寧郡公主墓志”考釈」『燕京学報』2003/5, № 14. pp. 71-93.

劉鳳翥　Liu Fengzhu

2006:「契丹大字《耶律祺墓志銘》考釈」『内蒙古文物考古』2006, № 1. pp. 52-78.

2010:「契丹大字《北大王墓志銘》再考釈」『中国多文字時代的歴史文献研究』(聶鴻音・孫伯君編) 北京，社会科学文献出版社．pp. 404-417.

『両千年中西暦対照表』

1956:『両千年中西暦対照表』(薛仲三・欧陽頤合編) 北京，生活・読書・新知三聯書店．

『論集…』　Труды…

1950: *Труды Семиреченской археологической экспедиции «Чуйская долина»* / Составлены под руководством А. Н. Бернштама. Москва-Ленинград. (Материалы и исследования по археологии СССР; № 14).